

教科・領域教育専攻

国際教育コース

沖津 麻依

指導教員 石村 雅雄

研究背景

カメルーン共和国（以下、カメルーン）は依然として急性・慢性感染症による死者数が多く、成人においても感染症全体の死亡率は全死亡率中 39.2%を占める。さらに 5 歳児未満の死亡原因 TOP10 には、急性呼吸器感染症、マラリア、下痢症、新生児敗血症、HIV/AIDS、麻疹の 6 つの感染性疾患が含まれており、これらの感染症が 5 歳未満の子どもの死因割合の約 50%を占めている。これは同国で小児の感染症予防がいまだに課題として存在していることを示している。

そこで、カメルーンにおける健康教育の教科書での取り扱われ方及び授業、また児童・生徒を見守り健康教育を教える立場である教員の学校保健や健康教育に関する知識習得の機会について両国間で比較を行う。またこれまでの日本の健康教育の変遷を振り返り、カメルーンが今後必要とする学校における健康教育のシステムやコンテンツについて考察したい。

第1章 教育と健康の関連性

日本の保健・衛生状態が改善した背景には保健衛生施策の他に教育の影響が大きい。Paul Glewwe によると、①公教育は直接的に将来の母親である生徒に健康に関する知識を提供することが出来る、②将来の母親たちが識字や数的計算能力を得ることで、子どもの健康問題をある程度診断し、解決することが出来る、③教育を受けた未来の母親たちは近代的な治療を取り入

れやすいということを明らかにしている。

(Glewwe, 1990) 日本においても就学率の上昇や、教育の高水準化に伴い将来的に母親となる女兒や女子生徒が教育を受けることが出来たことが保健指標改善の一端となっていると考えられる。また健康と教育の相互関係において親世代の教育の不足が次世代の健康状態につながるという相互関係性が明らかになっている。

第2章 アンケート調査

1. カメルーンにて保健授業を行い、授業終了後に保健授業終了後に授業を受けたアフリカ・カメルーン、ヤウンデ市内の中学校の生徒及び教員計 37 名に対し、質問紙を用いて授業後の学びを記入してもらった。調査内容は、①基礎情報（性別、年齢）②健康教育の授業後アンケート

「授業で何を学びましたか?」、「身体を健康に保つために何が出来ますか?」、「授業で習ったことの中で、何が好きですか?」、「授業で習ったことの中で、理解することが難しいと感じたことは何ですか?」の計 4 問とした。授業内容は生徒の中から任意で 2 名選び、生徒の手掌、手背、手首に白い絵の具を塗布し、片方の生徒には 10 秒程度で普段の手洗いを行ってもらい、他方の生徒には 9 ステップの正しい手洗いを実践してもらった。白色絵の具の落ち方の違いから、普段の手洗いでは多くの洗い残しがあることを示し、丁寧な手洗いが必要であること、手洗いをきちんと行うことで感染症を予防できる

ことを明らかにした。

2. 日本及びカメルーン教員に対する保健教育についての実態調査の調査対象者は、日本・徳島県の市町小学校及び中学校に所属する教員、加えてカメルーン・ヤウンデ市の小学校及び中学校に所属する教員（一部視学官含む）である。調査内容は①教員の属性（校種、担当教科、教職員歴、性別、校内での役職、学級担任の有無）②学校感染症に関する学習や経験について5問、さらに健康教育を学校で取り扱うことの意義について2問質問した。

第3章 保健教育シラバス及び教科書内容

1. カメルーンでは独立した「保健」という教科はなく、理科教科の中で教えられている。理科教育は小学校一年次より始まり、化学、物理、地学は環境教育として、生物、保健は健康教育（Santé）として扱われている。同国では今年度カリキュラム改訂が行われ、幼稚園のカリキュラムには「手洗い」が含まれることとなった。幼稚園での実際の実施状況は不明であるが、ヤウンデ市内の幼稚園を訪問したところ、間食前に手洗いをしている様子を垣間見ることが出来た。適切な手洗いの方法を記述したものはなく、また方法についての研修も行われていない。そのため、手洗いの方法は各教員に頼ったものとなっており、感染症罹患の減少につながるのかは疑問が残る状態である。

第4章 結論と考察

1. 考察

理科教科書内容や保健授業実践、授業後アンケート、幼稚園、小学校、中学校訪問から、目視で手が汚れていなければ料理を作る前や食事前に洗うことは稀であることが明らかとなった。教科書内容からは、清潔を保つ必要性を繰り返し述べ、衛生環境及び状態を向上させようとし

ていることは読み取れるが、具体的な手洗いのタイミングや正しい方法を記述しておらず、また幼稚園や小学校、中学校のトイレや手洗い場に手洗いに言及したポスターなどの存在はないことから実践に落とし込む環境や体制が整っていないと考えられる。加えて本年度より幼稚園の新カリキュラムに「手洗い」の項目が追加されているが、「実践の場」である幼稚園においても教員は手洗いの方法を子どもに指導する様子はなく、子どもたちはそれぞれの方法で手洗いを行っていたことから、「手洗いの意義」を教員においても理解が得られているとは言えない状況であると言える。さらに保健授業実践後アンケートでは感染症予防に関する記述は少なく、感染症予防に対する関心の低さも実践に結び付いていない一因と考える。教科書内容では一見すると日本の保健教科書の方が内容に乏しく、詳細な説明もないように見えるが、子どもの発達段階に応じた記述をしていること、また加えて実生活との結び付けも容易に行うことができること、さらに幼少期から手洗いに関する指導を教員自身が受けていることから実践を促す対応を行うことができることが手洗いの実践に結び付いていると考えられる。

2. 結論

手洗いは感染症予防の第一歩であり、予防概念を持つことは感染症だけではなく、生活習慣病などの慢性疾患へも関わる重要概念である。本稿にてカメルーンにて授業観察や教科書研究をしたことで、カメルーン及び日本の『子ども』の捉え方が教育方法に大きな影響を与えているのではないかと考えた。しかし、この問題については、本稿で明らかにすることはできなかったため、今後の課題である。